

## 第19回国際日文学シンポジウム「文化史上の源氏物語」

### 【総括】

松岡智之\*

第19回国際日文学シンポジウムは、2017年7月8日（土）、9日（日）に、総合テーマを「文化史上の源氏物語」として開催された。

1日目セッションⅠのテーマは、「制度・規範の変遷と『源氏物語』—明文化された制度と慣習としての制度—」である。

胡潔氏（名古屋大学）の基調講演「『源氏物語』と平安時代の婿取婚」は、唐令を継受した日本令の施行下にあっても、容易に変化しない基層文化として日本の婚姻慣習を論じた。女性が夫の親と同居しないという特徴を夫婦の居住類型から解説して高群逸枝の論の今日的価値を論じ、史料と『源氏物語』とをつき合わせつつ、一体化する父娘の「恥」の意識を剔抉した。

『源氏物語』が成立した平安時代中期、いわゆる摂関時代は政務の儀式化が進んだ時期とされるが、パネリスト報告1重田香澄氏（山口市歴史民俗資料館）「『源氏物語』の時代の儀礼と知識—「例」と「儀」、「説」—」は、「例」「儀」「説」の語に着目して古記録（貴族の日記）を読み解き、儀式作法家流化の諸段階を具体的に示した。こうした家の流儀への言及は、『栄花物語』には多少みられる。しかし、「例」の用例が多い『源氏物語』に家の流儀への言及がみられないとも指摘する。

報告2藤村安芸子氏（駿河台大学）「日本仏教思想史上の『源氏物語』」は、因果、宿世、回向等の仏教思想にもとづきながらも、教義的理解とは別次元で得られる、他者に苦をもたらすものと

しての自己認識が、朧月夜や女三の宮、さらに紫の上の生き方を変えたと指摘する。

報告3高野奈未氏（静岡大学）「注釈史上の『源氏物語』」は、中世源氏学から国学へと展開するなかで虚構の価値を宣揚して面目を一新するものの、文学に意義・効能を求める点では中世と変わらない。それが文学の注釈の〈慣習〉だと指摘した。

報告4丸山裕美子氏（愛知県立大学）「『源氏物語』にみる女房・女官の制度」は、「上（内）の女房」とも呼ばれる女官、尚侍・典侍を取り上げた。『源氏物語』に語られる尚侍・典侍のあり方は、平安時代初期から中期の実像とよく対応している。ただし、権門の娘が十代前半で尚侍に就任するという、作者と同時代に定着しつつあった慣習を物語世界に取り入れていない。その一方、『源氏物語』が描き、史料的に確かめられないものがあり得たかもしれないことに、母から娘への尚侍職の譲渡があると指摘した。

2日目セッションⅡのテーマは、「表象文化史の中の『源氏物語』」である。

基調講演は、張龍妹氏（北京外国語大学北京日文学研究センター）による「平安物語文学における「孝」の受容—『源氏物語』を中心に—」である。日本の古典文学に対する中国の「孝」の思想の影響は重要な課題であるが、張龍妹氏は、忠孝と併称される忠君との関係から、親・兄姉に対する孝行の問題を考える必要があると説く。孝は、人間の自然な感情や、大業の達成のための行動と対立することがある。矛盾をぎりぎりのところで解決するために「終孝」などの大義名分や仏教的

\*お茶の水女子大学准教授

な救済が要請されることを、中国、日本の古典を渉猟して解説し、『源氏物語』の冷泉帝の「孝」は、複雑な問題を排し、単純な親子関係に絞り込むことで成り立つのだと説いた。

パネリスト報告1 赤澤真理氏（岩手県立大学盛岡短期大学部）「建築史の中の『源氏物語』—同時代の住宅像と考証学のあいだ—」は、現実社会における建築様式の変遷をたどった上で、近世における古代貴族住宅に関する考証が、『源氏物語』との関わりにおいてなされることを、考証の歴史、近世の絵画資料によって説いた。絵画資料における古い図様の継承→古代的要素と近世的要素との混在→復古的検証による古代様式の再現へという展開をたどった。

報告2 植田恭代氏（跡見学園女子大学）『『源氏物語』にみる舞楽・催馬楽』は、『源氏物語』の音楽すなわち雅楽を扱う。日本の雅楽は、中国の宮廷音楽を輸入し、それが整理されつつ日本在来の音楽（神楽等）とも一部融合し、さらに日本で新作も作られていったという意味で日本化された輸入文化であり、舞踊を伴う舞楽が重要な位置を占めるのも特徴である。植田氏は、雅楽の歴史を概観した上で、『源氏物語』御法巻の法華経千部供養の場面における舞楽「陵王」、東屋巻に見える催馬楽「東屋」を取り上げる。動きの多い華やかな舞で宮廷文化を象徴する「陵王」は、紫の上の最晩年を飾るとともに、死期を意識する紫の上の孤絶した心境を浮かび上がらせる。『源氏物語』続篇では、「竹河」「総角」「東屋」と催馬楽の曲名が巻名にもなるが、催馬楽の詞章が物語の文章にも織り込まれ、物語世界を形作っていることを論じた。

報告3 石井倫子氏（日本女子大学）「能の『源氏物語』—「源氏能」は何を描くのか—」は、源氏能の作者に能役者ではない被官層の知識人が多いことを述べつつ、世阿弥以前、世阿弥時代、禅竹時代と区分して論じた。世阿弥以前から連歌寄合や梗概書などを通して『源氏物語』が謡曲素材

となった一方、原作離れも大きかったこと、世阿弥真作の確実な源氏能はないものの、世阿弥が足利義満時代の武家・公家の源氏文化の中で大成していったこと、金春禅竹は自身が『源氏物語』を十分咀嚼して作詞し得たが、そこには歌人正徹や稀代の文化人一条兼良との交流が作用していることを論じた。謡曲に限らず、謡い物・語り物の詞章に『源氏物語』の文章が取り入れられていることの指摘も興味深かった。

報告4 河添房江氏（東京学芸大学）「源氏絵に描かれた衣装—院政期から近世まで—」は、衣装に焦点を当て、原文主義と図様主義との概念を用いつつ源氏絵の変遷を鮮やかに論じた。土佐光吉「源氏物語絵色紙帖」の絵が衣装の見た目の華やかさを追求した図様主義の絵であることの指摘を皮切りに、遡る院政期の国宝「源氏物語絵巻」に描かれた衣装はおおむね原文に忠実であり、「竹河（二）」では中心人物の姫君よりも目立つ女房二人の衣装が、玉鬘巻末尾の衣配りで光源氏から玉鬘が贈られた衣装の色（山吹、赤）を彷彿とさせるなど、挿絵に留まらない物語理解をさらに示すこと、鎌倉時代末期の天理図書館本「源氏物語絵巻」と室町末期の浄土寺蔵「源氏物語図扇面散屏風」や土佐光信「源氏物語画帖」との間に、原文主義から図様主義への移行がうかがえ、そうした変化は「源氏絵詞」の変遷にもあり、さらに『源氏物語』の梗概書が衣装表現を説明するか否かとも対応することを指摘した。そのように進化した源氏絵の図様主義化は時代が下ると再び原文主義に回帰するが、その契機は本文の理解を助け、注釈的さえある挿絵を伴った版本の出版ブームであり、源氏絵における原文主義の復活定着には切臨『源氏綱目』の存在も大きかったとも指摘した。

両日ともに講演者も交えてディスカッションが行われ、赤澤氏と河添氏とに対し、『源氏物語』若菜下巻の女楽を絵画化する際の人物配置が建築との関係からどのように解せるのかを問う質問が

されるなど、充実したやりとりになった。

2日間を通して、社会制度、儀式儀礼から芸術に至る文化の諸部門において、古代に輸入した大陸文化が、平安時代の日本の貴族社会において咀嚼され、その時代に作られた長編物語『源氏物語』が古典となって後代の文化生成の拠り所となったことが明らかにされた。参加者アンケートでは、「日中の文化、制度の等の比較は『源氏物語』読解に不可欠と認識した。とても刺激的だった」など好意的な感想が多く寄せられている。